

〔古典紹介〕 松本歯学 15 : 334~348, 1989

key words : 絵画 — 抜歯用器具 — 変遷

## 絵画にみられる抜歯用器具について

市川博保

東京都

### Teeth Extracting Instruments in Pictures

HIROYASU ICIKAWA

*Tokyo*

#### Summary

There are many extracting scenes in pictures representing dental treatment. I studied the extracting instruments in the pictures printed chiefly in Proskauer's "Iconographia odontologica" (1926) and Moskow's "Art and the Dentist" (1982).

These pictures have been dealt with regards to their artistic genre and merit, but have never been dealt with in terms of their instrumental aspects.

The extracting instruments drawn are forceps, pelican, tooth-key, hitting stick, thread, saber and fingers. The forceps are drawn as a symbol of tooth extraction, and accordingly are not realistically represented. The pelican and tooth-key are drawn realistically. Extraction with a hitting stick shows that extraction was done as punishment. Scenes of extraction with thread have a humorous character. Also seen is a street performance of extraction by saber and fingers.

#### はじめに

歯科医療を描いた絵画の類は古くから存在し、その中で抜歯を題材としたものが比較的多い。これは近代的歯科医療とくに麻酔術が普及する以前の抜歯は最も確実な除痛法でありながら、抜歯時の苦痛が極めて大きく患者にとっては恐怖の世界であり、人々の関心が高かったことを物語っている。これらの絵画などには美術、風俗、風刺の面からみた解説が付けられてその価値が論ぜられている。しかし抜歯用器具の面からみたものはまだ

ないようである。筆者は抜歯を題材とした絵画などの中で、抜歯用器具がどのように取り扱われているかを調べ、抜歯用器具の変遷をたどってみた。

#### 資 料

資料として Curt Proskauer の Iconographia Odontologica (1926) の増補改訂版 (1976) (P と略す) と Bernard S. Moskow の Art and the Dentist「世界の絵画と歯科風俗史」(1982) (M と略す) の両書に掲載された作品を中心とし、Curt Proskauer u. Fritz H. Witt の Bildgeschichte

der Zahnheilkunde (1962) (PW と略す) や Michel Dechaume et Pierre Huard の Histoire Illustrée de L' art Dentaire Stomatologie et Odontologie (1977) (DH と略す) などの歯科医学史書の付圖も参照した。作品は抜歯器具の種類が特定できるものの中から選んだが、16世紀以降のものが大部分である。

### 作品にみられる抜歯器具

Elisabeth Bennion はその著 Antique Dental Instruments(1986)の中で抜歯器具をペリカン、エレベーター、スクリュー、歯鍵、抜歯鉗子の5グループに大別できるとしているが<sup>9)</sup>、今回調査した作品の中で使用されていた抜歯器具は抜歯鉗子、ペリカン、歯鍵、槌打棒、糸、サーベルなどであった。これらの作品を器具別に分け順を追って圖示する。「」内は作品の表題、( )内は引用した資料の略号と所載ページである。

#### I. 抜 歯 鉗 子

圖1:「St. Apollonia の殉教」 作者不詳 15世紀頃? の彩色木版画 15.2×11.4 cm ストックホルムの王立歯科大学 Wessler Collection (コピーを筆者所蔵)

圖2:「St. Apollonia」 作者不詳 18世紀の祈書に所載 水彩 11.4×7.6 cm ストックホルムの王立歯科大学 Wessler Collection (コピーを筆者所蔵)

圖3:「抜歯」 作者不詳 15世紀頃の写本 The British Library 蔵 (P 7)

圖4:「St. Apollonia の殉教」 銅版画 29×20 cm Guido Reni (1575-1642) の原画から B. A. Nicole (1743-1806) が版画にした (M73)

圖5:「歯抜き人」 油彩 David Teniers (1610-1690) Jean Angot Collection バリ (DH210)

圖6:「ヴェネチア祭りの歯抜き人」 油彩 79×110 cm Giovanii Battista Tiepolo (1696-1770) ルーブル博物館蔵 (M77)

圖7:「歯抜き人—最初の一人をどうやって見つけたか?」 リトグラフ 20.5×19.7 cm Denis August Marie Raffet (1804-1860) National Library of Medicine 蔵 アメリカ (M177)

圖8:「カーニバルでの大白歯抜歯」 彩色版画 21.9×15.9 cm Filippo Palizzo (1818-1899) (M81)

圖9:「奇態な名医難病療治」 木版画 39×27 cm 歌川国芳(1799-1861) 日本歯科大学新潟歯学部史料室蔵 (M273) 抜歯鉗子とともに床上の木床義歯にも注目する必要がある。

圖10:「本道外画難病療治」 木版画 39×27cm 落合芳幾(1833-1904) 日本歯科大学新潟歯学部史料室蔵 (M275) 国芳の弟子であった芳幾は圖9を模倣した。

#### II. ペ リ カ ン

圖11:ペリカンと歯鍵は既に使用されていない抜歯器具であり、あまり知られているとは言えないので、それらを収集したものを圖示する。(DH95)

圖12:「歯抜き人」 Bulloz が撮影した作品である以外のデータ不詳 (DH318) 机上にペリカンが置かれている。

圖13:「街の歯抜き人」 銅版画 Jan Wierix (1549-1619?) アントワープ (P18)

圖14:「歯抜き人」 17世紀初期の銅版画 Luigi Guidotti (P22 PW69圖)

圖15:「歯こわし人」 油彩 147×211 cm Gerald van Honthorst (1590-1656) ルーブル博物館蔵 (M31 DH360) M31の解説には「鉗子を使って下顎大白歯を抜歯している」とあるが、これは器具の持ち方や角度からみてペリカンと思われる。

圖16:「歯抜き人」 油彩 Theodoré Rombouts (1597-1637) ブラド美術館蔵 (P26 PW84圖 DH312) この作品は Paul André (1600-1639) (P27) と Manuel Salvator Carmona (1805年) (M33) がそれぞれ版画化している。

圖17:「歯科医」 油彩 David Teniers (1610-1690) 35×30.5cm ドレスデン絵画館蔵 机上にあるのがペリカンである。(P72)

圖18:「歯抜き人」 油彩 Harmen Hals (1611-1669) ケルン絵画館蔵 (DH315 PW47圖)

圖19「冷たい鉄」 カラーリトグラフ 27×21.9 cm Louis Leopold Boilly (1761-1845) 「しかめっ面集」として1823年に出版された (M157

DH350)

## III. 歯 鍵

図20:「5 フランの治療」 リトグラフ 21×28.6 cm Emanuel Noterman (1808-1863) (M193) 解説に「ガランジョーの鍵状ヤットコを使って抜歯している」とあるが、このガランジョーというのは外科医 René Jacques Garengéot (1688-1795)のことで、その著 *Traité des Opérations de Chirurgie* (1725) の中で彼はペリカンも図示しているということである<sup>1)</sup>。

図21: Garengéot の歯鍵を Bennion の著書から転載する。右側の上下がそれである<sup>2)</sup>。

図22:「良き中産階級—その45」 リトグラフ 35.6×25.4 cm Honoré Daumier (1808-1879) 1847年5月4日のル・ジャリヴァリ紙に掲載 (M189)「ガランジョーの鍵状ヤットコでやっと抜歯まで漕ぎつけたところである」と解説されているが、机上にあるのがその歯鍵である。

図23:「人生における辛い瞬間—その41」 リトグラフ 24.9×20.4 cm Honoré Daumier (1808-1879) 1864年3月12日のル・ジャリヴァリ紙に掲載 (M191 DH362) DH では作品の題名を「Garengéot の歯鍵」としてある。

図24:「力を抜くと歯はいつまでも抜けないよ」 木版画 Wilhelm Busch (1832-1908) (P166)

図25:「放浪歯抜き人」 カラーリトグラフ 31.1×21.6 cm Gustave Frison 1850年生まれ National Library of Medicine 蔵 ワシントン (M239) 術者が手にしている薬の宣伝をしているところであるが、机上に1750年頃の古い形の歯鍵が置かれている。

図26:「20世紀初頭の北アフリカにおける歯科治療」 (DH240) これは写真であるが、北アフリカでは20世紀になっても歯鍵が使われていたことを示している(写真は裏返しになっている)。また、わが国では明治16年(1883年)の規則改正によって歯科医術開業試験は医術開業試験から分離独立したが、その規則によって行われた明治17年(1884年)の試験には「抜歯鍵ノ用法及利害ヲ問フ」が出題されたということであるから、19世紀の末頃までは使われていたと考えられる<sup>3)</sup>。

## IV. 槌 打 棒

妥当な名称ではないかも知れないが、棒状のものを歯にあてがい槌などで叩いて抜歯する方法があった。その棒状のものに対して筆者が仮に名付けたものである。杉本氏は中国の抜歯の風習を紹介し、その中でこの用具を打牙器と呼んでいる<sup>4)</sup>。

図27:「St. Apollonia の殉教」 15世紀頃の彩色版画 作者不詳 コロンビア大学歯学部蔵 (M25 PW 扉)

図28:華岡青州の門人である本間玄調(1804-1872)が著した「瘍科秘録」の中にある槽柄と木槌の図である<sup>5)</sup>。槌打棒はこの槽柄にあたる。

## V. 糸

乳歯や動揺した永久歯を糸で抜歯することは日常生活の中でも行われているが、これを描写した作品もいくつかみることができる。

図29:「人間の情熱」 彩色木版画 12.7×20.3 cm John Collier (1708-1776) (M93)

図30:「抜歯」 彩色銅版画 12×14.8 cm 作者不詳 19世紀のもの National Library of Medicine 蔵 ワシントン (M135)

## VI. サ ー ベ ル

サーベルの刃を歯間にこじ入れて抜歯する方法のあったことが作品の中に描かれている。

図31:「サーベルによる抜歯」 18世紀のカリカチュアー (P107)

図32:「歯抜き人」 彩色リトグラフ 作者不詳 19世紀初期の作品 (P125)

図33:「歯痛」 彩色リトグラフ 20.3×21.9 cm Charles Aubry (19世紀初期の人) (M219 P131)

## VII. 手 指

手指を器具と見なすことが適当であるかどうかは別として、手指で抜歯している様子を描いた作品がある。

図34:「放浪歯抜き人」 油彩 30.7×19.7 cm Adriaen Brouwer (1606-1638) リヒテンシュタイン・ギャラリー蔵 (P37)

これを18世紀頃 W. Woernle が版画化した (M41)

図35:「無痛」 カラーリトグラフ 17.5×13.7 cm Adolphe Eugene Gabriel Roehn (1780-1867) (M161)

図36:「居合抜きと歯抜き」 渡辺華山 (1793-1841) の画冊「一掃百態」(1818)より<sup>9)</sup>。この頃、大道で香具師によって行われていた抜歯は、動揺した抜き易い歯だけを選び指先で掴んで抜いていたということである。

図37:「昔の中国と日本の抜歯の訓練法」 1927年発行のアメリカの歯科学書に、昔の中国と日本の歯科の学校として紹介されたもので、中央で指の使い方を教えているのが先生で、右で板をかかえているのが助手、座っているのが学生である。彼等は木の板に植えられた木栓を抜く練習中で、上達するにしたがい固く埋め込んだ木栓を用い、熟達するとはじめて人の歯を抜くことが許されたという<sup>7)</sup>。Weinbergerはこのことだけを、日本の歯科の歴史として紹介している<sup>8)</sup>。

## 考 察

抜歯を題材とした絵画などの美術的作品の中で、抜歯用器具としては鉗子が最も古くから描かれている。カルカッタのインド美術館にある抜歯鉗子を用いた抜歯のレリーフは紀元前2世紀のものであるといわれている(P 3)。ピサのCatharina教会には1320年頃のものであるといわれている抜歯鉗子を手にしたSt. Apolloniaの画像がある<sup>9)</sup>。

St. Apolloniaを描いた作品の大部分は抜歯鉗子を手にした像で、その代表的なものが図38の作品である。これはLeo Kannerの「Folklore of the teeth」(1928)の扉絵として使われているが、17世紀の作品である。このSt. Apolloniaの抜歯鉗子を持った左手は、医歯薬出版KKが昭和26年に改称する前の歯苑社の社章であった。(図39)。中にMano de St. Appollonia (St. Apolloniaの手)と書かれている。現在は使われなくなってしまったのが残念である。またSt. Apolloniaには記念切手がある。1枚は1979年の第13回口腔科学国際隔年学会を記念してサン・マリノ共和国が発行したもので、図1で示した木版画の図柄をそのまま切手にしたものであり<sup>10)</sup>、もう1枚は1983年オーストリアで開催された第70回世界歯学会(FDI)の記念切手である<sup>11)</sup>。いずれも抜歯鉗子を手にして

抜歯鉗子を描いた作品の中の抜歯鉗子は、形が大き過ぎたり、大臼歯を真っ直ぐな釘抜き状の鉗子で抜いているなど、非写実的なものが多く、抜歯鉗子は抜歯という行為を象徴しているものと考えられる。

ペリカンはGuy de Chauliac (1300-68)が最初に記述し、Giovanni d'Arcoli (Arculanus) (1412-84)がその著Practica (1460)の中で初めて図示したということであるから、ペリカンは14世紀頃から使われていたと考えられる。一方ペリカンのあとから現れた歯鍵はAlexander Monro (1697-1767)のMedical Essays and Observations (1742)の中で初めて記述されたといわれているが<sup>12)</sup>、1730年頃から使われていたようである。このためかペリカンと歯鍵はそれが実際に使用されていた時期と、作品が描かれた時期とがほぼ一致しているように思われる。すなわちペリカンは17世紀から19世紀までの作品にみられ、歯鍵は18世紀末から20世紀初め頃までに描かれたものが多い。またペリカンと歯鍵を描いた作品からは、その製作時期を類推することが出来そうである。この両者は抜歯鉗子に比べて写実的な描写が多いのが特徴と言えよう。

St. Apolloniaの殉教の版画(図27)が15世紀の作品であることや、中国においては打牙器による抜歯(欠歯)の風習が14世紀頃からあったとされていることから、槌打棒による抜歯法は古くから存在していたことがうかがえるが、暴力的な抜歯の感を払拭できず、風俗や刑罰として行われた抜歯を象徴しているように思われる。

糸による抜歯が実際に行われていた様子を示す作品をいくつか見ることができるが、そこに描かれた患者は術者の技量を信頼せず、猜疑の眼を術者に向け、苦痛で表情が歪んでいる。当時の医療に対する諧謔を表現しているように思える。

サーベルの刃による抜歯も幾多の作品によって描かれているが、歯科医療が大道芸として行われていたことを示す代表的なものであろう。

弛緩した歯は自分の手指でも抜けることは常識的に考えられるが、図示したようにそれが営業として行われていたことも描かれている。この手指による抜歯はサーベルと同じように大道芸として術者が腕前を誇示している様子が表現されている。

図37で示した手指による抜歯の訓練は、「歯の歴史館」から転載したものであるが、同書にはアメリカの歯科学書（1927年刊行）から引用とあるだけで、原著名が明らかにされていない。そしてこれを中国と日本でのこととしているが、Weinbergerは日本のことと述べているので、疑義が生ずる。描かれている人物の服装が中国風であるのは、中国で行われていたからなのか、日本人の服装を誤って中国風にしたものか判然としない点である。

エレベーターは押し棒や牝鹿の足、羊の足などと呼ばれて、抜歯鉗子と同様に古くから残根の抜歯に用いられていたにもかかわらず、それと明らかに指摘できるような作品は、今回の資料の中には見当たらなかった。ただライブツィヒにある医学史家として多くの業績を残したKarl Sudhoff（1853-1938）の研究所の医学史に関する蒐集品をデザインした切手の中にそれを見ることができ<sup>12)</sup>、それはいずれも17世紀の抜歯用器具で上が古い形のペリカン、下がネジで把握力を強くした抜歯鉗子、中の2本がエレベーターである。羊足状という説明が付いている（図40のC）。

### む す び

医療としての抜歯は有史以前から行われていたと言われているが、その用具として抜歯鉗子をはじめ、いろいろなものが使われてきた結果、幾多の変遷と改良が加えられて、現在の抜歯手術に用いられている形態の抜歯鉗子とエレベーターに落ち着いたものと考えられる。また古くから存在した抜歯を題材とした絵画などの美術作品を抜歯用器具の面からとらえてみても、このことが裏付けられていると思われる。

稿を終わるにあたり、終始有益なご助言を賜っ

た松本歯科大学 橋口緯徳教授に深く謝意を表します。

### 資 料

- ① Curt Proskauer (1967) *Iconographia Odontologica*. Georg Olms. Hildesheim. (1926年初版の増補版) (P)
- ② Bernard S. Moskow (1982) *Art and the Dentist* 世界の絵画と歯科風俗史。書林。東京。(M)
- ③ Curt Proskauer und Fritz H. Witt (1962) *Bildgeschichte der Zahnheilkunde*. Verlag M. DuMont Schauberg. Köln. (PW)
- ④ Michel Dechaume et Pierre Huard (1977) *Histoire Illustrée de L'art Dentaire Stomatologie et Odontologie*. Les Editions Roger Dacosta. Paris. (DH)

### 文 献

- 1) Bennion, Elisabeth (1986) *Antique Dental Instruments*, 31. Sotheby's Publication, London.
- 2) 同上, 42-43.
- 3) 成田令博(1983) 抜歯の文化史, 170. 口腔保健協会, 東京.
- 4) 杉本茂春(1973) 抜歯の一方法とその源流—取歯・打牙・適歯の相互関係. 歯医史, 1: 11-17.
- 5) 山田平太, 新藤恵久(1981) 歯の歴史館, 52. 日本医療文化センター, 東京.
- 6) 同上 10.
- 7) 同上 50.
- 8) Weinberger, B. W. (1948) *An Introduction to the History of the Dentistry*. Vol. 1, 145. The C. V. Mosby Co., St. Louis.
- 9) Hoffmann-Axthelm, W. 本間邦則訳(1985) 歯科の歴史, 129-131. クインテッセンス出版株式会社, 東京.
- 10) 谷津三雄(1987) 医歯薬史資料圖鑑一目で見る医歯薬史一, 290. 医歯薬出版株式会社, 東京.
- 11) 同上 289.
- 12) 同上 297.



圖 1：拔歯鉗子



圖 2：拔歯鉗子



圖 3：拔歯鉗子



圖 4：拔歯鉗子



圖 5：抜歯鉗子



圖 6：抜歯鉗子（部分）

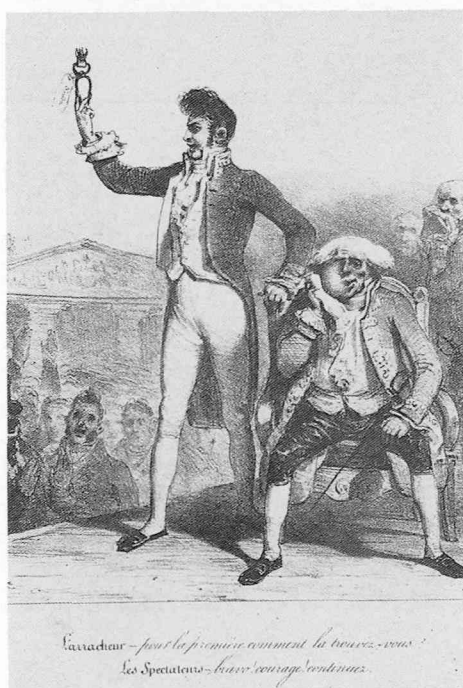


圖 7：抜歯鉗子



圖 8：抜歯鉗子





図9：抜歯鉗子



図10：抜歯鉗子

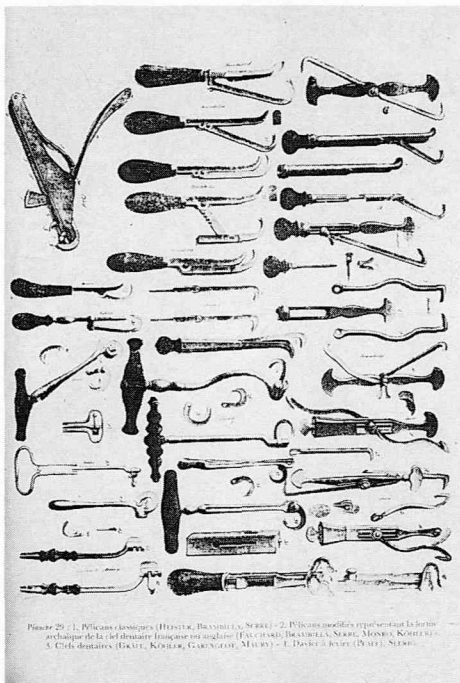


図11：ペリカンと歯鍵を収集したもの



図12：ペリカン





図13：ペリカン



図14：ペリカン



図15：ペリカン（部分）



図16：ペリカン（部分）



図17：ペリカン



図18：ペリカン



図19：ペリカン



図20：歯鍵（部分）

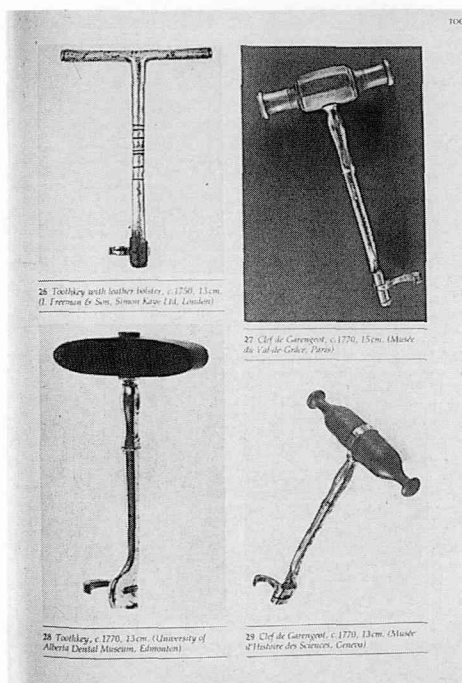


図21：Garengotの歯鍵（右側の上下）

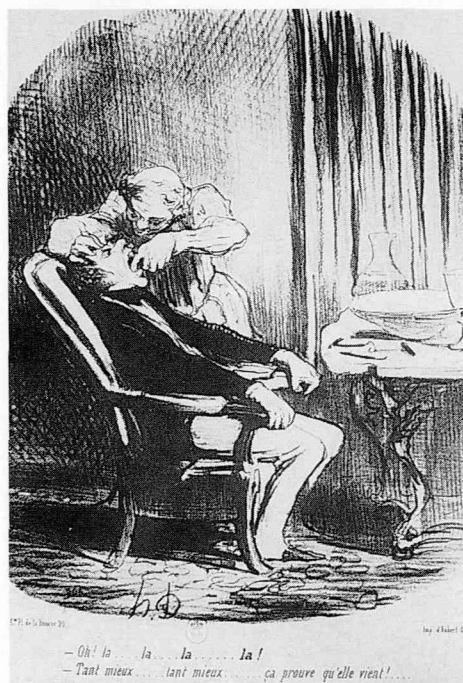


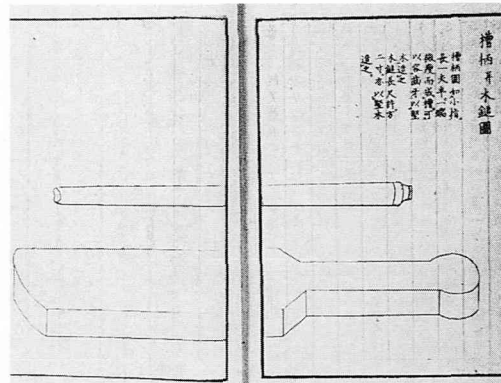
図22：歯鍵



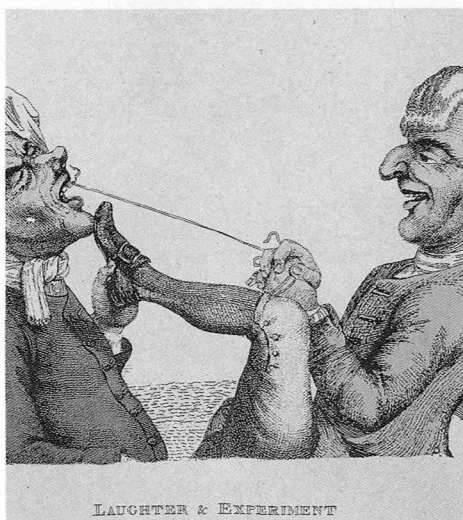
図23：歯鍵



図24：歯鍵







LAUGHTER &amp; EXPERIMENT

圖29：糸（部分）



圖30：糸



Anonym.  
Karikatur  
vom Ende des  
18. Jahrhunderts

Abb. 110.  
Zahnziehen mit dem Degen.

Sammlung Klein,  
Haag.

圖31：サーベル



圖32：サーベル（部分）



圖33：サーベル（部分）



圖34：手指



圖35：手指



圖36：手指



図37：手指による抜歯の訓練



図38：St. Apollonia



図39：歯苑社の社章



図40：AとBはSt. Apollonia, Cは17世紀の抜歯用器具の切手